

ロゴス  
 テラペイア  
 〈意味による生成〉への奉仕

—— フランクル臨床哲学の再解釈による教育理解深化の試み ——

岡本 哲雄

一 問題の所在

この世に自分の意志で生まれてくる人間はいない。自らが存在しているということは、実は深い謎である。しかし、人は自らの生を「被る」という仕方を受け容れ、この深い謎を抱えたまま、成長し、子を育み、老いて死ぬ。如何に自明な日常性の中にあっても、生・老・病・死の現実、折に触れてこの謎を喚起させうるが、そのときこの深き謎は、実はいつもすでに日常の歩みの足下にあつたのだ、と自覚される。どのような場合であれ、人が人と成るといふ営為の底にはこの深い謎が隠れているのである。だから人は、自己が生ぎることの〈意味〉を問わざるを得ない、また問うことが可能な存在である。しかし、問う以前に、前反省的な自己「了解」の中に、この〈意味〉の謎は深く含み込まれているのである。〈意

味〉は、この世界で「課題」や「使命」として発見されるべきものとされるが、常に、この「世界」を超えた彼方とも浸透し合っているのである。

人間生成を、世界に於いて在る自己が生涯に渡って、他者や事象との間で経験する相互形成の現実である、と考えるならば、我々はこの現実を深く一挙に掴まえるための鍵概念としての役割を〈意味〉に託したいと思う。そして、このことを通して、「人間生成を成就するために営まれる教育」といふ営為は、そもそもいったい何であるのか——この本来決して自明ではない根本問題にも迫りたい。なぜならその営為の底に「存在の謎」を内包させている人間生成や教育を理解し成就させるためには、それが如何なるものであれ「人間中心主義 (Anthropocentrismus)」的な (超越的なものに開かれる構えない) 考察では無力だからである。

本稿では、その手立てをV・E・フランクル (Viktor Emil Frankl, 1905-1997) の〈意味 (Sinn)〉を中心に据えた臨床

哲学に求めたい。というのも、後述するように彼の臨床哲学は「有限なるものと無限なるものが接するところ」を〈意味〉の座とし、そこを中心に「人間生成 (Menschwerdung)」を捉えようとした思想として解釈できるからである。そして、その臨床知には、この〈意味〉から「日常を透明化」(有限なる日常世界の自明性を、無限と接する地平において受け取り直すこと) するための方略が仕組まれているのである。確かにこれまでの教育研究においても、生きることの〈意味〉の覚醒が人間生成に非連続的飛躍をもたらさうと語られることはあった。しかし、人間生成という〈いのち〉の流れそのものをいつもすでに成立させている存在論的契機として〈意味〉が捉えられ、自覚的に理論化されたことはない。換言すれば「有限と無限が接するところ」で一挙に人間生成の実相を掴まえるという観点を明確にした既存の教育学理論は見当たらない。本稿では、決して、心理療法の一つとしてのロゴセラピーの理論枠組みを人間生成や教育の理解のために応用するのではない。フランクルの臨床哲学が、この「日常の透明化」という観点から人間生成論を展開したものとしてみれば、未だ十分に認識されていないことにも鑑み、再解釈の試みを

通して、その思想に含まれる臨床知そのものが、教育理解を深化させる一つの貴重な遺産であることを示したい。

戦後六十年目の本年は、ユダヤ人強制収容所の体験記録(邦題『夜と霧』<sup>①</sup>)の著者として知られるフランクル生誕百年に当たる。〈アウシュヴィッツ〉をはじめとする幾つもの強制収容所を潜り抜けた彼が遺してくれたもの、それはいったい何であつただろうか。フランクルは、ただ、極限状況における人間の現実を赤裸々に語つたのではない。そのことを通して人間存在が根差すべき根源的な在り方を解明し、それを体現することへの道を拓いたのである。幸いにも、彼はその思想を臨床知として結晶化させている。その生涯を閉じる二十世紀末に至るまで、彼は、市井の人々それぞれの生・老・病・死の現実と取り組むことで深めた「心術」を遺産としてのこしてくれているのである。

フランクルが創始したロゴセラピー・実存分析<sup>①</sup>は、いわゆるウイーン第三学派と呼ばれる心理療法の一つとして知られてきた。それは、従来のフロイトの精神分析(第一学派)とアドラーの個人心理学(第二学派)の一面性と歴史性を批判しつつ、意味喪失(ニヒリズム)の時代に求められる〈意味〉を志向する新たな人間学的心理療法として自らを規定している。もっとも、セラピーの場面では、あくまで補完的役

割を演じようとし、自らの絶対化を強く戒める。けれども、人間学的にみれば、ロゴセラピーは単なる役割上の補充に留まらない。それは、人間の実存の〈意味〉を解明する実存分析に基づいた「思慮 (Besinnung)」や「心術 (Gesinnung)」を含んでおり、このことが、フッサールのいう「自然主義的態度」に終始した還元主義的な医療や心理療法に「正気」を取り戻させようとする人間学運動の重要な一翼を担うことを可能にしたのである。フランクルの思想は、医療や心理療法を出自とするが、それを超えて、人間同士が互いに生きること―それは結局、人間の生成や救済の問題でもある―の根底にある「心術」を炙り出すことを可能にする臨床哲学であるともいえる。

本稿では、ロゴセラピーの本質を「<sup>ロゴス</sup>意味による生成」への<sup>奉仕</sup>と表現してみたい。ロゴセラピーは、単に医学的に病気を元に戻すための援助ではない。たとえ、どんな不条理な条件下でも、そのつどの状況に応じて自己の可能性を拓くことができるように、その人の人間的成長を励ますことが真の〈癒し〉をもたらすと考える。<sup>(2)</sup> そもそも、「現存在は、あるものとおあるべきものとの間の緊張関係として存在している。というのも、人間が現に存在するのは、存在するためではなく、生成するためだからである」<sup>(3)</sup> S.294 傍点筆者)。そ

のための援助がロゴセラピーの真意であることから、ここでは取って〈<sup>ロゴス</sup>意味による生成〉という表現を用いたい。

フランクルによれば、ロゴセラピーの「ロゴス」とは、日常において発見されるべき具体的な生の〈意味〉のことである。ただし、その場合、〈<sup>ロゴス</sup>意味〉は、世界内での道具連関という限定を明らかに超えたものとして規定されている。つまり究極的にそれは、「永遠」ないし「超世界」(フランクルのいう〈超意味 (Über-Sinn)〉)との関わりを常に保持しているものであることが暗示されている。一方、「セラピー(セラピー)」は現在では「癒すこと」や「治療」のみを意味するが、ギリシャ語のテラペイア *therapeia* が語源であるから、もともとは、①奉仕、世話 ②神への奉仕 ③子どもの世話、養育 ④病人の世話、看護、看病、治療 ⑤動植物の世話といった意味を含んでいる<sup>(3)</sup>。したがって、それは医療や心理療法のみならず、教育、宗教を含めたあらゆる人間的援助の本質を表しうる言葉である、と読み込むことが可能である。

実際、西欧においてロゴセラピーは、今や、少なくとも狭い意味での心理療法の一つに与えられる名称ではなく、人を援助するあらゆる領域(医療・看護・教育・宗教・ターミナルケア等)にひらかれて発展していく構えをもつ臨床知である。けれども、このことはまだ十分に理解されているとは

いえない。現代において流布した皮相な〈癒し〉理解への反省の意味をも込めて、言葉のもとの意味をここでは強調してみたい。すなわち、本稿ではフランクルが遺した臨床知（ロゴセラピー）を心理療法の領域を超えて、諸々の人間的援助の根源に通底する「心術」であることを示すために、それを「〈意味による生成〉への奉仕」と見立てたい。そしてこのことを証するために、以下では狭い意味での心理療法の理論枠に囚われないように、さりとてフランクルの臨床哲学の本質（深み）が損なわれないように、再解釈を試みたいと思う。

## 二 〈意味による生成〉の場の働き

—「実存分析」によって解明されること—

### 必然と自由の弁証法

人間は外的自由が奪われるときでさえ、自らの生の意味を問い、それを探究する内的自由を実現し得る存在である。制約で雁字搦めになったときでさえ、少なくとも自己の態度を決定できる自由をもっている。しかし、こうした態度決定は、身体的・心理的な制約や避けることのできない運命といった「必然」「から自由」になるだけでなく、同時にそのような自己がおかれた状況の要請に応答する「責任」を引き受けること「への自由」に向かつていなければならない。フ

ランクルは、人生は「所与 (Gabe)」であると同時に「課題 (Aufgabe)」であると考える。与えられた制約（必然）を受け留めつつ、人生が要請してくる課題、つまり、それは個別的な状況の中に眠っており、他ならぬ自分に実現されるのを待っている一回的で、独自の可能性（Ⅱ〈意味〉）に、一つずつ誠実に、行為によって応答すること—これが、ランクルのいう〈意味〉への「自己超越」、すなわち〈意味による生成〉なのがある。したがって、ランクルのいう〈意味〉とは、世界に於いて在るその人が発見すべき、その状況に一回的でその人独自の可能性のことである。〈意味〉は、その人によって状況や他者からの「呼びかけ」として聴き取られ、その人によって行為によって実現されるのを待ち望んでいる。このように未来（可能性）へ向かつて自らを投企し、「生成」へと促されなければ、我々は直ちに「必然」の中に再び引き戻され閉じ込められてしまうのである。ランクルの人間理解の本質は、まずもって、人間は本源的に「意味への意志」をもちうる存在であると捉える点にある。

つまり「必然性と自由は同じ平面上にはない」のであって、必然性という二次元的平面から垂直に三次元へと「自由はあらゆる必然性を超えて高まり、その上に構築される」。ロゴセラピーでは、これを「へにも拘らず」という精神の力

(Troznacht des Geistes)」と呼んでいる。しかし、精神的なものは、常に心理的・身体的次元と拮抗したり、協調する関係を保ちながら、人格全体を統合したり、表現したりする働きそのものであり、決して「必然」から離脱することの意味しない。むしろ「自由は必然を前提とする (Libertas supponit ne essitatem)」(② S.223)。まさに、「我々は生にへばりつきながら、生の上に漂っているのである」(デーメル) (② S.233)。また、そもそも人間は、死にゆく存在であり、失われていくことが必然であるがゆえに、自己存在の〈意味〉<sup>ロゴス</sup>を求め、それを実現しようとするのである。「死がそのようなに強い」のである。生と死は対立的に区別されながら、その実相は、一つの「生死」という働きである。「私たちの存在がまさに責任存在であるということの裏には死がある」(④ S.96)。したがって〈意味〉<sup>ロゴス</sup>による生成は、実のところ、この生と死の弁証法的緊張関係の中で生じているのである。

フランクフルトに少なからぬ影響を与えたハイデッガーが「内世界的に」存在するものの具体的な在り方として「手もと存在」「用具連関」を強調し、現存在「のために」を要として様々の「……のために」で繋がった「有意義な」「意味」連関として「世界」を分析したのに対して、後述するようにフランクフルトは、むしろ全く反対に「私は何のために何ができる

のか」「何を呼びかけられているか」を〈意味〉<sup>ロゴス</sup>発見の根本的な態度とする。また、「被投性」の根拠を「死」と結びつけ、「振りかかったもの」とみるだけでなく、「超越的なもの」から「贈られてある」とみる視点をより強く打ち出しているところにもフランクフルトの特徴があるように思われる。(4)このようなフランクフルトの〈意味〉<sup>ロゴス</sup>の思想の特徴は、〈受苦〉<sup>パトス</sup>との連関を示唆することです。そう明白なものとなるであろう。

### 〈意味〉<sup>ロゴス</sup>と〈受苦〉<sup>パトス</sup>——フランクフルト思想のふたつの中心——

そもそも、フランクフルトの臨床哲学は、ハイデッガーの他にもフッサール、シェーラー、ブーバー等々、二十世紀における幾つもの哲学的人間理解の影響を直接、間接に受けている。その様々の影響を受け留め、臨床や強制収容所での体験を通して独自に練り上げられた、彼ならではの人間理解の特徴とは、まずもってこの〈意味〉<sup>ロゴス</sup>を中心に据えた人間理解であるが、さらにはこれと相即的に〈受苦〉<sup>パトス</sup>をもう一つの中心に据えていることであろう。「ホモ・パティエンス (Homo patiens) Ⅱ 受苦する人」というフランクフルトの人間理解は、ラテン語の *patior* が、受苦・受動・受容・受難・情念などを含意することからも明らかのように、この人間という存在が、どんな場合でも、生きているということを自分で設定したわけではな

く、身体によって「世界」と交わり、様々な影響を「被る (leiden)」という仕方を受け容れている受動的な存在であることを表している。実に人間は、必然と自由の緊張関係に生きるホモ・パティエンスである。要するに、フランクルの臨床哲学は、近代という時代が合理主義的・自律的な「理性の人」を人格化してきたことに対するアンチテーゼとして、「受苦する人」を対置させたのであり、「能動 (action) を越えたところの受動 (passio)」を喚起し、最も深いところでは「現存在は受苦である (das Dasein ist Passion)」(③ S.333) という人間存在の真相を改めて示そうとしたのである。

したがって、〈意味による生成〉とは、この〈受苦 (感受)〉性と深く結び付いており、〈意味〉という〈その状況において、その時、その人に実現されているのを待っているそのつど一回限りの、唯一無二の可能性〉を身体によって感受し、行為によって実現することを表している。換言すれば、それは、すでに「世界」に於いて在るその人自身が、さらに「世界」との関係性を生成させていく営みなのであって、そこにはどんな場合も〈受苦 (感受)〉性の発動がある。たとえば、「体験」という身体を通した受動的な〈意味〉摂取 (「体験価値」) はもちろんのこと、「創造」という身体を通した能動的な行為による〈意味〉実現 (「創造価値」) も、そもそもはこの世

界に投げ入れられて在る人間が、ものからの呼びかけを受容することから開始される。「ものたちは、花嫁のように精神的存在者を待ち焦がれている (Die Dinge harren bräutlich des geistig Seienden.)」(⑤ S.85) のであり、それにポイエーシス (制作活動) として応答するのである。また、避けられない不幸な運命などに直面した場合には、まさに、そのことへの態度を通して〈意味〉は実現 (「態度価値」) されるのだが、この場合〈意味による生成〉は、まさに〈受苦による生成〉と言い換えてもよいであろう。〈意味〉は、決して恣意的に作り出されるものではない。あくまで、状況の中で感受され、発見されるものなのである。そして、加えていえば、このフランクルのいう〈意味〉は、先に見たハイデッガーのいうような、「として」構造をもつ「意味」の帰趨連関という「世界内」での限定に尽きない、ある宇宙的な深みを湛えたものと考えることができるのである。

「はじめに意味ありき、そして見よ、意味は行為であった。」  
“Im Anfang war Sinn, und siehe, der Sinn war die Tat.”

周知のように、フッサールが定式化した「志向性」とは、「何ものか (ノエマ) へ向かう意識の働き (ノエシス)」であり、意識と対象との根源的な関係性を示しているといえる。その

意味で、志向性という働きそのものが、一つの関係性の「場」を表しているのである。我々は、先験的な意識のフィルターを通して対象と向き合っているのではなく、対象の「傍らに居合わせて (an-wesen)」その本質を直観するのである。

このようにして知覚作用において何かが主題として規定されるが、その際、それが可能となるためには、常に予め、何らかの一般的な意味の枠が投企されていなければならない。つまり、このような全体的な意味の地平が予め存在しているからこそ、個々の意味の主題化ということが可能になっているのである。このような、「全体と部分の相互規定」という「理解」の解学的循環構造ないしゲシュタルト心理学の「図／地」の構造が、フッサールのいう「志向性」の働きに属しているといえよう。

基本的には、フランクルの〈意味〉<sup>ログコス</sup>発見・摂取はこの「志向性」の働きと親近的である。しかし、彼はなおその不充足さを指摘する。「図／地」構造ないし「として」構造で把握されようとするのは、あくまでそのものの「本質 (Wesen)」ないし「相在 (Sosein)」にすぎない、と。すなわち、それは「生きられた現実 (die Vollzugswirklichkeit)」を静的に捉えようとする点で客観的認識の域を出ないのである。フッサールはそれにぎりぎり挑戦したものの、そもそも、「生き

られた現実」には認識論的に近づくことはできない。「生きられた現実」においては、状況に一時的で、唯一無二の「実存 (Existenz)」ないし「現存在 (Dasein)」が把握されているからである。フランクルは〈意味〉<sup>ログコス</sup>発見・摂取が「世界」からの呼びかけの意識的、無意識的な聴従であり、それへの応答を通しての「世界」の可能性の実現（「世界」形成・創造）であることを強調する。これを、彼は「自己超越 (Selbstranzendenz)」と呼ぶ。その上でフランクルは、現象学という「志向性」とは『自己超越』というより包括的な人間的現象の認識論的位相である」(⑤ S.221)と理解するのである。

実はこの「自己超越」が可能なのは、そもそも人間は元来「世界」の「もとに在る (Beklein)」という「存在本来の原能力」を有するからであるという。客体の「呼びかけ」に主体がひきつけられ、主体が無となつて客体（しかしこの時点で、もはや主客未分の現実）へ没入し、そのものの固有性・一、回性を完全に把握（フランクルはこれを敢えて「実存的認識」＝「絶対的認識」とも呼ぶ）し、そして同時にその可能性の実現を促している。―「もとに在る」とはこのような「生きられた現実」を示している。そしてこの「もとに在る」という〈原能力〉は、それ自体、前反省的でありながら、知覚、

思考（相互理解）、言語（相互の意思疎通）といったさらなる可能性の根拠とされる。「はじめに意味ありき」というのは、〈意味による生成〉の働きが、前反省的に「世界」の「もとに在る」という〈いのち〉の流れに予め潜在していることを意味している。フランクはこれを心理学的な翻訳の必要から、やや実体的表現ではあるが「精神的無意識（das geistige Unbewusste）」と名づけたのである。そこでは「エートスのなもの（倫理的本能＝良心）」「エロース的なもの（愛）」「パトス的なもの（美的直覚）」が三位一体となって〈いのち〉の流れをなしている。たとえ、乳児であっても、「世界」の「もとに在り」、いつもすでに〈意味〉を摂取し、刻々と生成を遂げ、また「世界」の生成をも促している。ただし、それは心身の有機的な表現が優勢であるために、表面には現われず大抵は隠れたまま、無意識のうちに進行しているのである。フランクはいう。人間は「前反省的存在論的自己理解（das präreflexive ontologische Selbstverständnis）」を有するのであり、学問によって反省的知識を得る以前から、前反省的・無意識的に、「そもそも生きているとはどういうことかがもとともわかつている」（⑥ S.33）のだ、と。

### 〈意味による生成〉の場と超越

さて、前述の通り、〈受苦〉を人間学的な重要契機とみる以上、フランクは人間の「世界」経験を、本来的な経験と非本来的な経験という二元論においてみているのではない。本来的な経験の当為性を強調し、返す刀で日常経験の非本来性を批判するだけなら、彼の思想は陳腐な二分法的観念論に陥っていることになる。ハイデッガーは日常性を頹落態としたが、フランクの臨床哲学は、むしろ日常性をこそ尊重している。本来性が、目指されるべき観念として自足し孤立するとき、それはその時点で本来性を失っているのである。本来性は非本来性の中において、はじめて透けて見うるものとなる。日常性とはそのような場であるはずである。フランクのロゴセラピーの課題は、まさに、人間相互の日常的な営みの底にいつもすでに流れている「無意識的な精神性」という可能態（potentia）を、いったん行為によって顕在化（actus）させ、再び日常の自明性へと戻していくこと、そして、この運動を「習性（habitus）」とできるように訓練することにある。つまり、このような仕方ですべて「意味による生成」の場を現成させ、「日常性の透明化」を企てることにあるのである。〈意味による生成〉は非本来性が纏わりつかない純粹な経験なのではなく、まさに非本来性の衣をまといながら本来性が



滲み出ているような経験、そのような「有限と無限」の二重写しの中で〈生成〉が生じているような経験、を意味しているのである。その経験は、まさに〈受苦<sup>パトス</sup>〉的とならざるを得ないのである。

ところで、人間存在の属性としての〈受苦<sup>パトス</sup>〉性は、それが自覚化されるとき、場合によっては、人間が「世界」内部で被る〈運命〉そのものの意味を問わせることになるであろう。けれども、その答えは人間の計らいを超えている。この「世界」全体に〈意味〉が有るのか、無いのか、それは有限な人間が論理的に判断しようのない問題である。しかし、ロゴテラピーは、「世界」の〈意味〉への信頼が、そのつどの具体的な状況の要請への直向な応答の積み重ねによって、次第に形成されていくことに気付かせようとする。「それが真実だから信じる」というのではなく、「信じるという態度を真実のものにする」ことこそが大切なのだ、と。それがフランクルのいう〈超意味 (Über-Sinn)〉への信頼である。すなわち、たとえ世界内の文脈においては不条理に感じられる状況においても、〈意味〉は隠されていること、そしてそれは人間の計らいを超えたところから贈り届けられていることへの信頼である。そこに彼自身の神義論 (Theodizee) への応答がある。彼は「私たちが時間の中で創造したり体験したり苦し

たりしていることは、同時に永遠に向かつて創造し体験し苦悩している」(④ S139)のだという。すなわち「自己超越」は、「世界」内部での超越でありながら、同時に〈垂直に〉超越(内在即超越)し、「世界」地平を超えた彼方である〈限りない開け〉(「超世界」)へと向かい、〈意味〉はその彼方、すなわち「超意味」から照らし返されて浮かび上がっている(超越即内在)のである。換言するならば「自己超越」は、いつもすでに世界内における「水平への超越」でありながら、同時に「垂直への超越」でもあるという「反対の一致」の運動と考えてもよいであろう。その際、「超世界」は、「世界」を超えた彼方なのであるから、否定を媒介として「世界」と繋がっていると理解されねばならない。

とりわけ、実体的・観念的に「神」が指定されるや否や、それはいかかわしく、疑わしいものとならざるを得ないニヒリズムの時代であればこそ、フランクルは「本来繋がりえないものとの関係」(⑤ S74)という逆説的表現で、〈隠された神〉への信仰〈という超越観を表明している〉のである。フランクルにおいて「神は全てにして無である (Gott ist alles und nichts)」(③ S371)。(9) それは実体として掴まえられないものであるからこそ、一切を包括し、日常の至る所に現成しうる絶対的なものである。そして、「神の同時的な、絶

対的超越と絶対的親近性、……無限の遠さと無限の近さといふ逆説」(③ SEIN)を自覚しない信仰のあり方は、この「神の死」(ニーチエ)の時代、とりわけ「アウシユヴィッツ」以後(アドルノ)の時代に耐えることはできない。もつとも、そうであるからこそ、フランクルにおいてこの「逆説性」は、実は「信仰」そのものの本質を表わすものとなつていたのである。

しかし、そのような「信仰」のあるなしに拘らず、実は、この「本来繋がりにえないものとの関係」という逆説は、逆説のまま、いつもすでに日常の「意味」経験の底に隠れていることをフランクルは示唆しているのである。そして、まさに否定を媒介としているがゆえに「超世界」は「世界」と地続きの延長ではなく、真の「包摂者」となる。「創造」「体験」といった日常経験が「意味」あるものとなるのも、身体によって「世界」と交わり、それを「被り」つつ、その経験を成就させようとする何らかの働きに身を委ねるからであろう。つまり、当人に自覚されていようといまいと、「意味による生成」の場がそれとして成立するということの中に、いつもすでに、フランクルのいう「超意味」の働きがなければならぬのである。このことが自覚にのぼるとき、「世界」における「意味による生成」の働きは、「限らない開け」(「超

世界」と浸透し合う場所、「有限なものが無限なるものに絶えず出会う場所」(④ S189)に於いて在る働きとして受け取り直される。「意味による生成」は人間生成の原動力であるから、「個々の人間生成は、すべて、つねに新たな奇跡」(② S188)として自覚されることになるのである。そして、実は、自明化された日常世界において、その日常の底に「奇跡(Wunder)」を感じ取ることができるのは、そのつど人生からの呼びかけを感受しているパトス性が洗練されているからに他ならない。

### 三 「意味による生成」の場をひろく心術

—「ロゴセラピー」の本質—

#### 逆説志向・脱反省・態度転換

医療、看護、宗教、心理療法、教育等、人が人を援助する営みすべてにおいて、ロゴセラピーが求めることは、働きかけられる者自身が「世界」へと開かれ、自己自身の「意味」へと向かつて「自己超越」する態勢を自ら形成することに他ならない。そしてそれは、実は働きかける者自身が、例えば教育者や医療者として、自ら「意味による生成」を生きているかどうかにかかっている。というのも、そのような援助者であればこそ、人生に対するどのような態度が「意味による

生成を促進させるかを知っているからである。臨床の場面においては、その患者のおかれた歪な状況をそのつどよく理解し、状況の文脈にどのような揺さぶりをかけ、変更を促せば、患者自身の「自己超越」への通路を切り拓けるのを感じ、行為に移さねばならない。ロゴセラピーの技法である「逆説志向 (Paradoxe Intention)」と「脱反省 (Derreflexion)」は、そのための援助者の代表的な働きかけ方を定式化したものと解釈できよう。

「逆説志向」は、必然性や固定観念に雁字搦めになった自己から距離をとる「自己距離化 (Selbstistanzierung)」能力の強化のために用いられる。敢えて自らが恐れていることを願望させるというユーモラスな思考訓練によって、「予期不安」から生じる心理的な悪循環に歯止めをかけようとすることである。「脱反省」は、「世界」に「閉ざされて在る」ことから必然的となる自己中心的な執着心と自己自身への過剰な反省を、視点をずらすことによって、また他の何らかの課題に意識を集中させることによって、「世界」へと「自己超越」する道をひらく術である。これらは「必然と自由の弁証法的緊張関係」という人間学的原理に自覚的に、状況を鋭敏に判断し、<sup>ロゴス</sup>意味による生成を阻害するものを取り払うきっかけを与える術なのであり、その本質は近代医学の対象化の

まなざしを補完しうる対人関係の「機転 (タクト)」<sup>(?)</sup>の典型を技法化したものであるともいえよう。

臨床の場面によつては、援助される側の生きる文脈が一八〇度転換させるべく、人生に対する視点の変更を迫ることがある。ロゴセラピーでは、これを特に「態度転換 (Einstellungsmodulation)」と名づけている。強制収容所の限界状況の中で<sup>ロゴス</sup>意味を見出すために、フランクが定式化した「人生の意味についての問いの観点の変更」(「人生の問いのコペルニクスの転換」)を促すように、つまり「人生から何を我々はまだ期待できるかが問題なのではなくて、むしろ人生が何を我々から期待しているのが問題である」(① S126)と気づくように臨床の場面でも働きかけるのである。そこでは、自立的・能動的に状況を変更できないことから絶望している人が、実は、知らず知らずのうちに自己を「世界」の中心に据えて、自己の利益という視点から「世界」と向き合っていることに気づかされ、翻つて「自己がそこに於いて在る場所」の「呼びかけ」に聴従する、勝れて受動的な態度へ転換されるように促される。

もつとも、当人が自ら発見するのでなければ「彼自身の真理」となりえないことに鑑みれば、援助者自身は援助される人に自分の真理を「押し付けること (Oktroi)」を避け、一

人ひとりのものの考え方や生き方に対して寛容でなければならぬ。しかし、いったん援助される側が「彼自身の真理」、すなわち〈意味〉を発見したならば、彼がそれを自らが引き受ける責務のある真理として承認するまでは、その真理は「実現せよ!」「救済せよ!」と呼びかけてくる。彼に対して「非寛容」で、「情け容赦ない」ものとして立ち現れるのである。したがって、援助者もまた、彼が彼自身の〈意味〉を実現できるために「手を緩めない」べきなのであって、終始「非指示的」であるわけにはいかない。というもの、さもなくば人間が人間として存在するための不可欠の要素である「形而上学的欲求」(〈意味〉を求めた欲求)を抑圧し、「形而上学的軽薄さ」(der Methaphysische Leichtsin) (シエラー)へと援助される側を導いてしまうからである。

発見されるべきは、彼自身の真理、状況に固有の真理であり、それは決して「一つの」真理なのではない。彼の遠近法(パースペクティヴ)から見られた真理である。しかし、フランクはそれを「真理『そのもの』」であるという。「真理が人間に許す唯一の絶対性は、個々の人間に真理が啓示される〔そのそれぞれの〕遠近法(パースペクティヴ)の絶対的な唯一性の中にある。またそれゆえ、遠近法主義が相対主義に帰着すると考える必要は決してないのである」(③ S.265)。

この〈意味〉の「超主観性」の主張が、相対主義の虚無が表層を覆うニヒリズムの時代において、人間生成を生の課題として語ることを可能にさせている。

### 〈意味による生成〉と他者性

繰り返し強調することになるが、教育者(大人世代)、医療者、心理療法家等が、このように〈意味による生成〉の場をひらくことができるかどうかは、まずその人の人生や仕事に向き合う態度によって決まる。このことは、フランクの表現で言い換えれば、無意識的にすでに働いている「意味器官(Sinn-Organ)」(〈意味〉を感じる器官)としての「良心(Gewissen)」の働き(倫理的本能)を自覚化させ、なお一層「洗練」させるという課題である。その場合、我々は明らかに人間存在のもう一つの属性である自己中心性(「私のために」)をどのように昇華させるかという課題に直面することになる。けれども、このことが難しい。たとえば、「他者のために」してあげる」という表現が、しばしば醜悪な響きをもつのは、そのように表明された行為が、常に「私のため」というエゴイズムと癒着し、独善を招いてしまうからである。「良心の洗練」の如何を問うことは、そこで、状況や他者からの呼びかけを聴く、その聴き取り方の質

を問うことである。ここで次に問題にしたいのは、援助される側の課題であると同時に援助者の課題でもある、このような「良心の洗練」という営みに「他性」の契機がどのように含まれているのか、ということである。たとえば、たとえ親であつても、その子の人格、その子が生きる状況は、代理不可能で固有のものである以上、「他(者)」である。このような「他(者)性」の自覚は、状況の一回性や人格の固有性への尊厳を自覚させるという意味で、他者への倫理的責任の大前提であるとすれば、「意味による生成」の場をひらく心術」には、それはどのように内包されているであろうか。

フランクと同様、収容所体験をもつエマニエル・レヴィナス(一九〇六一一九九五)は、「他者の他者性」を徹底的に推し進めたことで知られる。フッサールが、超越論的主観を原点として主体から客体に近づく仕方、「世界」を認識しようとしたのとは対照的に、レヴィナスは「我と汝」関係の力点を「我」でもなく、ブーバーのように「間」そのものに置くのではなく、「汝」(他者)へと移動し、他者に対する自己の責任性、換言すれば「外部」から到来する他者の「傷つきやすい無防備の顔」に対する「負目」の意識を極限にまで推し進め徹底させた。そして、そのことによつて徹底して自己を捨てて他者の「身代わり」となることを「命令」と

して自覚させるのである。彼によれば、ブーバー的な対話の思想は、この「対話の対等性」や「相互性」を普遍的原理としている限り、「他者性」を内に取り込み同化して所有しようとする「我」執を払拭しておらず、全体主義的な暴力にあえなく巻き込まれ、変質してしまう可能性がある。

実は、この「我」の「汝」に対する無限の責任、その意味での両者の「非対称性」を強調したレヴィナスの考え方に通じる要素が、フランクの思想にないわけではない。たとえば次の人間存在の「責任性」を語るくだりには、「意味による生成」を遂げていく際に折に触れて自覚しうる「他性」の契機を読み取ることができる。ただし、それは必ずしも他者の「他者性」のみを指すのではなく、その人に呼びかけてくるそのつどの「状況」の「他性」を暗示している。

人間の責任とは、おそろしいものであり、同時にまた、すばらしいものでもある。おそろしいのは、瞬間ごとに次の瞬間に対して責任があることを知ることである。……一つの可能性を選ぶというだけでも、いわば他のすべての可能性に対して、存在しないという宣告を下すことになるのだ。……それでもすばらしいのは、将来、つまり私自身の将来が、ほんのわずかではあつても

とにかく、瞬間ごとの自分の決断にかかっていることを  
知ることである。……私が日常の中で「起こした」こと  
は、私が救い出すことによって現実のものになり、つゆ  
と消えてしまわずにすんだものなのだ。(④ S140)

その状況が〈汝、救済せよ!〉と「非寛容」で「情け容赦  
のないもの」として立ち現れるとき、その状況は明らかに  
〈他性〉を含んでいる。けれどもフランクは、それをレヴィ  
ナスのように〈外部〉とは言わない。フランクは「もとに  
在る」という事態の中で、他の存在者は「それ自体明らかに  
精神的存在者の〈外部〉に在るのでも〈内部〉に在るのでも  
ない。……むしろ端的に (einfach)〈現に (da)〉在る」(②  
S138139)のだという。そして、その〈現〉において、つま  
り「責任性」(≪意味による生成≫)の働きそのものに「お  
そろしさ」と「よろこび」が同居しているのである。否、そ  
もそも〈意味による生成〉という精神的無意識の流れは、「お  
そろしさ」と「よろこび」の区別以前のところにある。

ところで、ポール・リクール(一九一三―)は、レヴィ  
ナスの「絶対的他者性の思想」にみられる、〈他〉を〈外部〉  
におき、決して〈同〉に回収させない「断絶(非関係)の効  
果」が、「誇張の用法」のレトリックによって戦略的に産出

されていることに理解を示しながらも、「『汝殺すなかれ』と  
私に言う〈他〉の声は、私の声となって、私の確信に到達し  
なければならぬのではないか」と反問している。自己から  
他者へ、他者から自己へという二つの動きを弁証法的な運動  
と捉え、自己の中心に他者が現前していることを証しようと  
したリクールは、レヴィナスのように良心の声を裁く声(禁  
止の命令)に還元しない。そうではなく、「この禁止の命令  
から、善く生きる命令へと導く坂道を遡るのをやめてはなら  
ない。……状況内の道徳的選択の流れをたどりつづけねばな  
らない」と考える。それは、旧約聖書の「雅歌」で若者が恋  
人に向かつて、「私を愛して!」と懇願するときの響きを帯び  
た「善く生きるための命令」であるという。

ここで、フランクが〈意味による生成≫を促す〈良心〉  
の働きは、まずもって、状況(もの、他者)から呼びかけを  
聴き取るという契機なしにはありえないと考え、それを「も  
のたちは、花嫁のように、精神的存在者を待ち望んでいる」(傍  
点筆者)と表現していたことが思い起こされる。すでに述べ  
たように、〈意味〉の摂取とは、状況(もの、他者)の一回  
性、独自性を愛しながら捉え尽くし、その可能性を完全に救  
済することである。彼は、語源的にヘブライ語の「認識」を  
表す言葉が「性交」と同根であることを示唆し、「認識」は

〈愛〉(絶対的認識)を前提として成り立つという。そして、

この〈愛〉と同根の〈良心〉の声を「汝殺すなかれ!」といった「禁止の命令」と結び付けない。彼はむしろピンドロス(前五一―四四六)の「汝のあるところのものに成れ! (Werde, der du bist.)」という命令を〈意味〉からの呼びかけの内実に当てる。そしてそれを「唯一独自に汝たりうるもの、ならびに汝たるべきものに成れ! (Werde, der einzig und allein du sein kannst und sein sollst.)」と敷衍するのである(③ S.317)。

この命令は、リクール流に「善く生きるための命令」であると言いつても、あながち見当外れではなからう。というのも、フランクは「倫理の存在論化」によって善悪を実体から解放し、〈意味〉の遂行を促進するものを「善」、それを阻害するものを「悪」と規定し直すからである。それゆえに、この命令は抽象的なものではなく、その人がおかれた独自の状況に則した、極めて具体的・日常的メッセージとして、すなわちフランクの言に従えば、カント的な普遍的命法ではなく「個人的法則」(ジンメル)として受け取られねばならない。ロゴテラピーはその日常的・具体的な当為の発見を促すのである(「倫理の現象学化」)。そしてこの命令は、すぐさまその人自身の実存に体现され、行為へと移されなければ

ならない(「倫理の実存化」)。

確かに「愛」をめぐる言説が、ロマン主義的な陳腐な情緒的「相互性」に還元されるという事態に最も敏感であったのがレヴィナスであろう。その意味で、「誇張」のレトリックの効果を伴う彼の「絶対的他者性」の思想は、教育的日常において「責任性」の実存的地平を切り拓くためのメタ理論的戦術としては有効に機能するのかもしれない。けれども、実際に自覚されなければならない「責任性(答責性)」を誘発する「他者性」の契機は、「禁止の命令」であるというよりは、「善く生きるための命令」ではあるまいか。その命令は、我々が「自己から出ること」(自己超越)を誘発する〈他性〉を含むと同時に、再び「自己に出る」(自己実現)という生成の運動を形成させるのである。

#### 四 〈意味による生成〉への奉仕<sup>オラベイト</sup>

—それは「摂理に一つの機会を与える」こと—

さてここで、子どもと共に生きる大人の在り方に焦点を絞るなら、重要なことは、自らの〈意味による生成〉を生きる中でどのように「子どもと共に生きる状況」と向き合うかであろう。フランクの「人生の観点のコペルニクスの転換」にかぶせていえば、「私が、教育(子ども)に何かを期待する」

ということが問題ではない。つまり、期待することを「目標」とし、それを実現するための「手段」としての期待を教育にかけ、またそのようになるように期待して働きかける「対象」として子どもを捉えることではない。また子どもの内からの生物学的自己展開と生成を同一視し、その力に過大な期待を寄せることでもない。そのような態度が〈意味による生成〉を発動させるわけではない。それは、かえって大人の〈意味(Sinn)〉に対する盲目、すなわち「思慮(Besinnung)」

の欠如を招かざるをえないだろう。そうではなく、翻って「教育(子どもと共に生きるこの状況)は、私に何を期待して(呼びかけて)いるのか」と問いの観点を転換することが重要である。無論、このことは大人世代全般に求められている。いつもすでに子どもとともに生きる現実へと投げ出されている大人が、そのつどその子どもの存在の固有性と時間や場所の唯一性によって規定されるところの、ダイナミックに変化する状況下で「何を呼びかけられているのか」を聴き取り(受動)、それを行為によって「応答」する(能動)在り方へ転換することが期待されているのである。この「在り方」は一朝一夕には実現できないにしても、絶えず自己をそのように拓くことを心がける(〈受苦(感受)性〉の発動)ことで、次第に修練されていくものであろう。つまり、そ

で教育を担うものの「責任(答責)性」が培われ、大人(教育者)の〈意味〉を感受する器官(≡良心)が洗練されるのである。そして、このような「心術」の形成は、教育の場面においても〈意味による生成〉を妨げるものを、そのつどの状況において感知し、それを取り除くような働きかけを可能にする。「逆説志向」や「脱反省」の基本原理は、日常において人間生成の現実を拓こうとする教育的行為においても働きるものである。

以上のような、大人が教育に臨む態度を〈意味による生成〉への奉仕」と表現したい。それは勝れて「受苦(感受)的」な「心術」であるといえるであろう。すなわち、この「奉仕」が意味するところは、二重の内容である。それは、まず第一に、大人が「子どもと共に生きる状況」において、その子の存在そのものが、それだけで〈意味〉に満ちたものとして捉え、その存在そのものに「イエスと言う(Sagen)」ところから出発する。このとき、子どもは確かに〈他者〉には違いないが、大人はその〈他性〉を〈汝、殺すなかれ!〉という「禁止の命令」として受け取っているのではない。その子と共に「善く生きるための命令」、すなわち〈汝、愛(救済)せよ、そして汝のあるところのものに成れ!〉という命令として受け取っている。大人自身がそのことに耐



身できるように自己をひらく訓練（受苦能力の自己鍛錬）は、やがて「世界」に対する根源的信頼の醸成へと繋つていくのである。つまり、どんな状況においても、そこには〈意味〉が隠されているということへの信頼を大人自身が次第に受肉化していくのと呼応して、子どもの中の「世界」に対する基本的信頼も一層確固なものにされていく。そしてこのことが大人の〈意味〉への信頼をさらに深めるのである。このように「奉仕」のこころがけは、やがて心の習性態（habitus）としての「心術」へと生成していくのである。

したがって、第二に、大人が「奉仕」するところの〈意味〉による生成は、単に子どもが〈意味〉によって生成する事態を指すだけではない。子どもの生成が大人の生成を促し、大人の生成が子どもの生成を促進する。このようにして「世界」自身が生成する。そういったダイナミックな相互の生成作用をも表している。そして、そういった働き合いを成就させているものが、計り知れないロゴスの働き（〈意味〉経験を通して働く、計り知れない〈超意味〉の働き）なのであって、それに身体を共鳴させ、参入していくこと―これが「意味」による生成への奉仕の最も根源的な意味である。

ひとは「摂理に一つの機会を与え」なければならない。

……その機会とは、すなわち、「あらゆる個々の人間生成という、常に新たな奇跡」を成就し、一人の新しい人間を創造するという機会である。この「創造」は、なんと云つても、証言する人、この奇跡を証する人によって可能にされるのだ。（②S.188）

フランクが示唆したのは、日常生活の中で具体的な〈意味〉を求めて悪戦苦闘しながら生きる人間は、どんな場合でも実のところロゴス（宇宙の理法、摂理）の恵みを受け取り得る「器（うつわ）」であるということである。宗教的自覚のあるなしに拘らず、そのことに変わりはない。〈意味〉からの呼びかけを聴き取るセンスを洗練させる訓練は、やがて「摂理に一つの機会を与える」（ヤスパース）役割を果たすという自覚にまで深まっていくことが必要である。この「摂理（ロゴス）」の働きの計り知れなさ、すなわち「奇跡」に立ち会う「証人」であるというのが、「奉仕者」の意味するところなのである。そしてこれは近代の専門分化と物象化によって隠蔽された、人を助け成らしめるすべての援助者の使命に通底する共通の核に他ならない。「子どもと共に生きる状況」においてもそれが忘却されていることは言うまでもない。

\*フランクルの著作からの引用箇所は、文中に(番号、頁)の順で略記しているが、以下がその一覧である。なお引用に際しては、括弧内の邦訳に準びつつ、必要に応じて改訳させていただいた。

- ① ……*trotdem Ja zum Leben sagen. — Ein Psycholog erlebt das Konzentrationslager.* Ungedruckte Ausgabe, 7. Aufl. Deutscher Taschenbuch Verl. München, 1988. (霜山徳爾訳『夜と霧』みずす書房／池田香代子訳『夜と霧—新版—』みずす書房)
- ② *Der leidende Mensch (Der Unbedingte Mensch)*, Druckgesehene Neuausgabe, München, 1990. (山田邦男監訳『制約される人間』春秋社)
- ③ *Der leidende Mensch (Homo patiens)*, Druckgesehene Neuausgabe, München, 1990. (真行寺功訳『苦悩の存在論』新泉社／山田邦男・松田美佳訳『苦悩する人間』春秋社)
- ④ *Die Sinnfrage in der Psychotherapie.*, 3. Aufl. Piper & Co. Verl. 1988. (山田邦男・松田美佳訳『それでも人生にイエスとろう』春秋社)
- ⑤ *Der Wille zum Sinn*, Erweiterte Neuausgabe, München,

1991. (山田邦男監訳『意味への意志』春秋社)

- ⑥ *Im Anfang war Sinn*, Erweiterte Neuausgabe, München, 1994. (山田邦男・松田美佳訳『宿命を超えて、自己を超えて』春秋社)

- ⑦ *The Task of Education in an Age of Meaninglessness.* (國學院大學日本文化研究所紀要「第二十四号」一九六九年所収)

註

- (1) ログセラピーと実存分析はいずれも「精神的なものに方向付けられた」臨床哲学を意味するが、ログセラピーは「精神的なものからの療法」という臨床的実践として、実存分析は「精神的なものに向かつて」の人間存在解明の研究方向として、一応区別される。しかし、最近の西欧のログセラピストたちは、理論と実践が分ち難く結びついているという自覚から、常に *Logotherapie und Existenzanalyse* と併記することが通例となっている。本稿ではそれを踏まえつつも、再解釈の便宜上、一応の区別を念頭において使い分けている。

- (2) ただし、フランクルの場合、非連続的な〈覚醒〉のみ

を目指したのではなく、自明なる日常世界の「透明化」により、一つ一つの日常的経験や行為の尊厳を取り戻させようとした点に特徴がある。

(3) 古川清風編著『ギリシャ語辞典』(大学書林) 参照。

(4) ただし、フランクルの思想と後期ハイデッガーの転回以降の思想との親近性は感じられるが、ここではその問題は置いておきたい。

(5) パトスはここでは限定された意味で用いられている。

ただし、当然ながら美的直覚は身体を媒体とするから〈受苦<sup>パトス</sup>〉にも通じている。

(6) フランクルは次のように印象深く述べている。「人間が自分との対話において、そして最終的には汝との対話において話しかけるものが『無』であるように思われるのは、それが、……あらゆる存在者の根拠であり、存在そのものであるからです。『見よ、たとえ彼が私のそばを通り過ぎてても、私には何も見えない。また、たとえ彼が漂いすぎても、私は少しも彼に気づかない』(ゴブ記、第九章第十一節)。(③ S.371 / 山田邦男・松田美佳訳『苦悩する人間』一九六頁)

(7) ミッシェル・フーコー『臨床医学の誕生』(みすず書

房) 第七章参照。

(8) ポール・リクール、久米博訳『他者のような自己自身』

(法政大学出版局、一九九六年) 四一九頁。なお、内容の解釈に際して「訳者あとがき」を参照した。

(9) ここでリクルールの思想に深く立ち入ることはできないが、より正確には「正しい制度において他者とともに、他者のために善く生き、この願望をもつ者として自己自身を評価することを自分が命令されていると認識すること」(同、四三三頁)と表現されている。

(近畿大学)

Der Dienst (therapeiā) an „das Werden durch den Sinn (logos)“  
Die Vertiefung der Bedeutsamkeit der Erziehung durch die Umdeutung  
der klinische Philosophie V. E. Frankls

Tetsuo Okamoto  
Universität KIN-KI  
Assistenzprofessor

Dieser Aufsatz ist ein Versuch, die klinische Philosophie V. E. Frankls, die „Logotherapie und Existenzanalyse“ genannt wird, als den Dienst (therapeiā) an „das Werden durch den Sinn (logos)“ zu beurteilen, und dann dadurch die Bedeutsamkeit der Erziehung zu vertiefen.

Die Frage nach dem Sinn des Lebens liegt immer schon auf den Boden der menschlichen und zwischenmenschlichen Tätigkeit. Seine klinische Philosophie kann so verstanden werden, daß sie den Begriff „Sinn“ „auf die Stätte einer fortwährenden Begegnung des Endlichen mit dem Unendlichen“ setzt, und aus diesem Stützpunkt heraus die Menschwerdung zu erläutern versucht. Die „Logotherapie und Existenzanalyse“ hat die Bestimmung, seinen eigenen Sinn finden zu lassen. Also hat sie auch die „Besinnung“ und „Gesinnung“ den Alltag durchsichtig zu machen nämlich durch ihn hindurch sehen zu lassen auf das Ewige und dann auch sehen zu lassen, wie dieses Ewige auf das Zeitliche (das Alltägliche) zurückverweist.

Der Begriff „Sinn (logos)“ ist immer schon mit „Leiden (pathos)“ unterteilbar in der Wirklichkeit seiner praktische Philosophie. Beide sind zwei Brennpunkte seiner Anthropologie. Aber niemand hat bis jetzt verstanden daß beide „immer schon unterteilbar“ sind. Also richten wir hier unseren Blick darauf und versuchen daraus seine Philosophie umzudeuten. Danach werden wir zum Wesen seines Glaubens geführt. „Die Bezogenheit auf ein Unbeziehbares“ so erklärte er es in paradoxer Weise. Dieses paradoxe Verhältnis zum Transzendentalen liegt immer schon auf dem Grund der Alltäglichkeit die wir auch mit Kinders zusammen leben. So, was ist im tiefsten Sinn die Gesinnung der fränkische praktischen Philosophie? „Man müsse der Vorsehung eine Chance geben“ so sagte Frankl. Das muß der Kern der Gesinnung aller Berufe sein, die die Bestimmung menschlicher Unterstützung haben. Aber in der Zeit der Spezialisierung und des Empirismus wird sie vergessen, auch auf dem Feld der Erziehung.